

外国語学習の意味について

－バイリンガル研究の視点から－

石王 敦子

はじめに

外国語を流暢に話してみたいと思う人は多い。海外旅行に行くと「言葉がしゃべれたらいいのに」と思い、それをきっかけに語学の勉強を始めたりもする。国際化が進む現代において、母語以外の言語が使いこなせることは社会的にも有利であり、個人的にも種々の経験を楽しむことができるようになるからである。日本は島国だったこともあり長年にわたっておおむねひとつの言語を使用し他の言語に触れる機会が少なかったが、このような環境は世界の中では比較的少ない。大陸の場合、国境付近の地域では両国の言語が使用されているし、移民を多数受け入れてきた国々では、様々な言語と文化が持ち込まれ二言語以上の環境がめずらしくないからである。

たとえば所用で訪れたカナダのオタワでは、街で出会うほとんどの人が状況に応じて英語とフランス語を使いわけていた。ホテルの従業員、タクシーの運転手、列車の乗務員とその観光客、市場の屋台の店員まで、初対面の時彼らは最初に「Hello!, Bonjour!」と言い、英語とフランス語の両方で「こんにちは」と話しかけてくる。そして相手の返事を聞き、その言語に応じて自分の話す言語を選択する。街中でいろいろな言語を使う人のいる状況が、あたりまえなのである。もともとカナダは英語とフランス語が公用語になっており、国会でも二言語が使用されている。また公共の文書もすべて二言語で配布される。もちろんカ

ナダの全国民が二言語を使用しているわけではない。ただ首都オタワでは、政府関係者が多いことと、カナダでフランス語を使用しているケベック州と隣接していることなどから、自然に二言語を使用する環境になっている。とはいえ、出会ったほとんどの人たちが、場面に応じてすばやく言語を切り換えるようすは新鮮であった。日本では特定の職業の人でしか見られない光景だからである。

日本でも外国語学習はさかんである。しかし国際語のひとつとして世界でも広く使われている英語は、中学1年生から学習しているにも関わらず、なかなか海外生活で使えるレベルには至らないという批判を受けている。ある調査によると、外国人ビジネスマンは「日本ではホテルですら英語が満足に通じない」と嘆き、2003年度にアメリカで公開された映画「Lost in Translation」では、全く英語の通じない日本社会が描かれている。このような現実をうけて、小学校から英語教育を始めようという提言もあらわれ、外国語をいかに教えいかに学ぶかということには多くの人が関心を持っている。子どもや大人にとって外国語を学ぶというのはどういうことなのかを、言語能力の諸側面に注目しながら、主としてこれまでに行われてきたバイリンガル研究に基づいて考えていきたい。なお本稿では、母語と第一言語は、子供が最初に獲得する言語ということではほぼ同じ意味に使っている。

1. バイリンガルとは

「バイリンガル-二言語併用者-」という言葉はよく使われるが、一口にバイリンガルといっても、その定義は広い。「もうひとつの言語で完結しかつ有意義である発話ができること、すなわち“Hello!”と言えさえすればバイリンガル」という多くの人が含まれるような広い定義から、「ふたつの言語を両方とも母語のように使用できること」という限定された人たちしか対象にならないような狭い定義まである(山本、1991)。通常は、「2つの言語を使用する能力を持つ人」(山本、1991)や「コミュニケーションの場で、場面に応じて二つ以上の言語を使い分けるような人」(芳賀、1988)というあたりを考えるとが多い。一方、言語には「読むこと」「話すこと」「聞くこと」「書くこと」の四つの能力がある。筆者自身が在外研究でカナダに滞在していたときの経験をもとに、日常生活におけるこれら四つの能力について考えてみたい。

ひとつめはニュースで知った話である。カナダは、移民をたくさん受け入れてきた国であるが、あるとき移民に関する法律が変わり、移民の人たちは役所に出向いてその手続きをしなければならなくなった。役所は手続きを知らせる文書を各家庭に送付したが、期限までに手続きをしなかった人も相当数いた。原因は、英語やフランス語による文書が理解できないことである。役所から電話で呼び出されて手続きにやってきた人は、テレビのインタビューに答えて「読み書きはそれほど勉強していないため文書を読むことは難しい。」と話していた。移民の人たちがカナダで仕事を獲得するためには、まずは英語を聞いて理解したり話したりするというコミュニケーション能力が大事になり、読み書きは二の次になってしまう。もちろん徐々に読み書き能力も身につくのだが、滞在初期の頃はそれほどでも

なくそれが今回のような事態を招いてしまうことになる。

もうひとつは自分自身の経験談である。一年間の滞在予定でカナダに来た当初は、銀行口座の開設、水道や電気、アパートの契約など複雑な手続きをたくさんしなければならなかった。それらはいずれも文書を見ながらだったので何とかできたが、電話をひくために電話会社に出向くと、手続きのための質問が口頭のみでなされた。質問を文書で見せてもらえれば書いて答えることは比較的たやすくできたのだが、同じ質問を口頭で聞かれると質問が理解できなかつたり答えが相手にわかってもらえなかつたりして、結局手続きに一時間以上かかってしまった。手続きに手間取った他の理由として、筆者自身にカナダでの電話手続きについてのスキーマ、すなわち知識のようなものがなかったこともあげられるが、やはり英語での聞き取りや会話能力が十分でなかったことが主たる理由だと思われる。筆者の場合は、移民の人たちとは異なり英語の読み書きは多少できるが、聞き取りや話すことが苦手だったということになる。

これらの事例を考えてみると、第二言語として外国語を習得する場合、四つの能力を同じように同時に発達させることができればそれにこしたことはないが、それが困難な場合も多いことがわかる。Cummins (1991) は、第二言語の習得に関して、言語能力を二つに分けて議論しているという。ひとつは、伝達されようとしている意味が、文脈的な手がかりに支えられている場合の言語運用の能力であり、もう一つは直接的なコミュニケーションの文脈から切り離して、言語的な手がかりのみに頼って言語を分析するような能力である。前者はコミュニケーションを重視した会話力をさしているが、後者は外国語の文法の時間に必要とされるような能力をさしている(井上、2002)。なお「バイリンガル」の各定義では、特に言語の細かい能力についてまで

言及はされていない。しかし「コミュニケーションの場で場面に応じて二言語を使い分けられる」ということから、私たちのイメージでは、バイリンガルというときには、どちらかといえば聞いたり話したりするコミュニケーション能力を念頭においていることが多いように思われる。状況に応じてフランス語と英語を使い分けるオタワの人たちは、まさにバイリンガルの定義にぴったりといえるが、読み書きについても両言語が十分に発達しているかどうかは人によって差があると思われるからである。

したがって言語能力をどのように分けて考えるにせよ、外国語教育をおこなう場合は、各自の目的によってどの能力を主として発達させるのかを考え、計画する必要があるのではないだろうか。

2. バイリンガルのための教育方法—イマージョン・プログラム—

二言語を使いわけているオタワの人たちは、全員が自然にバイリンガルになったわけではない。オタワをはじめとして、カナダのニューブランズウィック州などケベック州周辺の地域では、古くから積極的に二言語教育がおこなわれてきているのである。その代表的なものが、イマージョン・プログラムである。

山本（1991）や井上（2002）によると、イマージョン・プログラムは「言語浴（language bath）」と呼ばれ、子供たちが第一言語の発達を損なうことなく第二言語を習得できるように設置されたプログラムである。カナダで1960年代後半に行われたプログラムでは、英語を第一言語とする子供たちに第二言語のフランス語を習得させることが目的であった。幼少の頃からすべての教科の授業を、第二言語をとおして行おうとする。イマージョン（immersion）というのには「ひたす」という意味があり、子供を「外国語がいっぱいのお風呂」につけて外国語のコミュニケーション能力をつけさせようという試みである。すなわち、外国語の時間だけでなく、学校の中でつねに外国語が使用されている環境をさしている。井上（2002）は、表1のようにイマージョン・プログラムの特徴をまとめている。これによると、プログラムへの参加はあくまで自由であり、最初は第一言語を話すことも許される。教師は両言語を理解できるバイリンガルであるため第一言語も理解でき、いざというときのコミュニケーションには困らない。さらにイマージョン・プログラムにはいくつかのタイプがあり、就学前から全教科について行うもの、一部教科について行うもの、また就学前からではなく数年遅れて始めるものなどの数種類がある。しかし、いずれのタ

表1 カナダのイマージョン・プログラムの教育方法（井上，2002，p32）

-
- ①イマージョン教育は強制ではなく、自由な選択でなされる。
 - ②（ほとんど）すべての教科で、L2による授業がおこなわれる。
 - ③教室内でのL1の使用は、少なくとも最初の1年半は許される。
 - ④教師は、二言語併用者でこどものL1は理解するが、L2のみ使用する。
 - ⑤カリキュラムは、イマージョン教育以外で成されている通常のものを採用する。
 - ⑥教室内のL2でのコミュニケーションは、意味内容を重視した自然なものとする。
 - ⑦産出の能力（話す力）より、理解の能力（聞く力）を優先させる。
 - ⑧参加する子供たちは、はじめL2の能力をほとんど有していないものとする。
-

注：L1：第1言語，L2：第2言語

表2 イマージョン教育に関する研究結果 (井上, 2002, p34)

- ①母語使用者と同等の能力を取得するまでに6、7年を要する
- ②年少開始の子供たちで、より高い満足感が得られる。
- ③学習障害児などにも、このような教育は適している。
- ④同時に二言語で読み書き能力を育成すると混乱が生じる。
- ⑤読み書きに関する能力は、年長の学習者において効果的である。

イプのプログラムでも開始後数年経過してからは、第一言語での授業時間数が増えていく。これは、第一言語の発達も保証しながら第二言語を獲得させることが、プログラムの目標であることによる。開始されて以来、多くのイマージョン・プログラムの評価では、子供たちは第一言語も第二言語もほぼ十分に発達させることができたとしている。井上(2002)は主な結果を表2のようにまとめ、Cummins(1991)がいうところのコミュニケーション能力は、イマージョン・プログラムで身につけやすい可能性があるとして述べている。

ここで注意しておかなければならないのは、イマージョン・プログラムは、社会の主流言語集団に属する子供たちが、第二言語を習得できるように設置されたプログラムだということである。山本(1991)は、バイリンガルのさまざまなタイプをあげる中で「エリートバイリンガリズムと大衆バイリンガリズム」について言及している。この区分は、どのような社会的背景のもとに二言語を習得するに至ったのかという立場からの分類である。エリートバイリンガリズムは、社会経済的に恵まれた階層に属する者が、選択の結果として二つの言語を習得する状況である。一般的にこのカテゴリーに入るバイリンガルは、バイリンガルであることが社会の中で高く評価される場合が多い。それに対して大衆バイリンガリズムは、母語以外の言語を習得することが生存のために必要ないしは強要される状況下でバイリンガルになることである。移民と

して違う言語の国にやってきた人たちや少数民族の人たちがそれにあたる。このような人々たちには、社会への同化を目的とした言語教育がおこなわれる。このサブマージョン・プログラムとよばれる言語教育では、子供たちの母語や母国の文化は無視され、教員も母語を理解できないことが多い。子供たちにとっては、自分の母語が自分の住んでいる社会から否定される事態になるのである。結果として、多くの子供たちが、第二言語はおろか母語の獲得もままならない半言語状態に陥るといふ(山本, 1991)。

おそらく、日本社会で英語を勉強したりカナダでフランス語を学習してバイリンガルになった場合は、エリートバイリンガルとみなされる。しかし、日本にやってきた外国人子弟に対する言語教育は後者のようになりかねない。やはり何のための外国語学習なのか、どんな能力の獲得を目的とするのかを、言語を獲得する社会的背景にも配慮して明確にし教育方法を選択しなければならないということになる。

3. バイリンガルの認知発達

イマージョン・プログラムやサブマージョン・プログラムのように、子供時代から第二言語にふれると、第一言語の発達はどのようなのであろうか。イマージョン・プログラムでは第一言語も第二言語も健全に発達し、サブマージョン・プログラムでは両方の言語が中途半端になっている。これらの一見矛盾した

現象を説明する理論として、山本（1991）は、Cummins（1978, 1979）による閾仮説と発達相互依存仮説を紹介している。

発達相互依存仮説では、第二言語の言語能力は子供がすでに獲得している第一言語の言語能力と相関的な関係にあると考える。すなわち、第一言語が十分に発達してから第二言語を集中的に与えた場合は、第一言語の発達を犠牲にすることなく第二言語を発達させることができるが、そうでないと半言語の状態になるというのである。つまり第一言語が発達した分だけ第二言語も発達するというものである。閾仮説は、バイリンガルであるということが、子供にとって肯定的・否定的な影響を及ぼすのは、子供の両言語の能力がどのレベルに達しているかによるというものである。まず第一言語と第二言語両方に、熟達度について低閾レベルと高閾レベルを設定する。子供の第二言語や第一言語の言語能力がともに未発達で低閾レベルまで達しない場合は、認知能力に否定的な影響がでる可能性が高い。しかし第一言語も第二言語もともにもう一つの高閾レベルまで達し年齢相応に発達していると、バイリンガルであることが認知能力に肯定的な影響を及ぼす。その中間はいずれかの言語が年齢相応に発達している段階で、この段階では認知能力には影響がないというのである。ここでいう認知能力への肯定的影響というのは、たとえば、バイリンガルの子供たちは、拡散的思考といわれる柔軟な発想に基づく思考が得意であったり、新しい言語文化的環境に比較的早く適応することが可能だったりすることである（井上、2002）。

このように発達相互依存仮説と閾仮説では、バイリンガルであることが子供の認知能力の発達に肯定的に働くためには、二つの言語能力の十分な発達を基本的条件としている。すなわち外国語そのものの教育だけではなく、第一言語も年齢相応にきちんと発達させなければならないというのである。ここで、「第

一言語の十分な発達」とはどのような能力を考えればいいのだろうか。おそらくコミュニケーション能力だけでなく、複雑な文章が読みこなせたり論理的に思考したり文章が書ける能力なども含まれるのではないかと思われる。言語はコミュニケーションの手段でもあるが、言語心理学者ヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）も指摘するように「思考を支える道具」でもある。思考を支える道具として機能するように、第一言語が発達している必要があるということだろう。山本（2000）は、読み書き能力を含めた母語教育の重要性を論じ、日本にいる外国人児童・生徒たちの母語を護る必要性を述べている。教育をするうえで読み書き能力を含めた国語力を大事に考えるのは、カナダの大学でも経験した。そこでは大学に入った教養学部の新入生全員に、書くことを中心とした英語熟達度テストがおこなわれていた。合格点に達しない者はライティング・クリニック（writing clinic）で補習授業を受け、二年次終了までに合格しなければならないのである。これらは、第一言語の発達が重要であることを示唆している。

ただ「考える能力は」は、必ずしも第一言語だけによるものではないかもしれない。日本で教育学を学んだ中国人留学生やアメリカで心理学を学んだ日本人留学生に話を聞くと、それぞれ自分の専門である教育学や心理学について考えるときは、第二言語である日本語や英語の方が考えやすいという。すなわち専門分野の知識を獲得した時に使った言語の方が、考えやすいというのである。しかしこれは、第一言語で獲得した思考様式が第二言語に転移していると考えられることもできる。ここでは「考えること」を、論理的な文章を読んで理解したり筋道だてて考える能力と仮定したが、思考と言語の問題はその定義も含めて広い議論があるので、どのような定義をするのかによっても異なってくる話だと思われる。

4. 言語間の類似性の影響

ここで、バイリンガルの認知に影響を及ぼす言語間の類似性についてふれておきたい。この要因についてはこれまでも多くの研究がなされており、一定の成果があげられている。たとえば英語とドイツ語やフランス語などのように、二言語間が類似している方が言語間の混同や混乱が起りやすいこと、また第二言語にどれだけ熟達しているかという程度によっても、混乱の起り方が異なることなどである(石王, 1999)。ただこれまでの研究のほとんどは、英語やフランス語、ドイツ語、オランダ語、スペイン語などの西欧言語間同士の相互作用についてである。これらの言語では使用文字がアルファベットであることが多く、cognatesや言語間での同音異義語などを用いた研究も積極的に行われている。cognatesというのは、通常両言語において形態と意味が似ている単語のことをいう。たとえば、英語の“tomato”とオランダ語の“tomaat”のような関係の言葉である。日本語と西欧言語との相互作用を考える場合は、文字の形態や発音が異なることから、西欧言語をもとにした認知モデルがそのまま適用できるとは限らない(石王, 2005)。あまり似ていない言語同士の場合でも、第一言語の能力は第二言語の発達を支えるのだろうか。

Abu-Rabia & Siegel (2002) は、カナダに住む9歳から14歳のアラブ人の子供たちについて、両言語のさまざまな能力を読みに関難を持つ子供(reading disability)に注目して調べている。子供たちは幼少のときから英語で教育を受けており、アラビア語は家で話されていたり特別な教育を受けることによって獲得された言語である。実験の結果、アラビア語で読みに関難を持つ子供は、英語でも同様であった。このことから、この子供たちは言語に固有というよりは両言語に共通な障害を持っていると考えられた。日本語と同様ア

ラビア語と英語の表面上の違いは大きいですが、言語を支えるシステムのようなものはほぼ普遍であり、ひとつの言語での発達や問題は、もうひとつの言語での発達と問題にも影響を与えていることになる。さらにこの研究で、バイリンガルの読みに関難を持つ子供は英語モノリンガルの読みに関難を持つ子供に比べて、英語の非単語の読みやスペリング課題の成績は良かった。Abu-Rabia & Siegel (2002) は、これはアラビア語からの正の転移だと考えており、バイリンガリズムが両言語の読み能力に、必ずしも悪い影響をあたえるものではないとしている。

5. 外国語学習は子供時代に始めるべきか

バイリンガルに育てようとするイマージョン・プログラムは、就学前や小学校時代から開始されることが多い。家族で外国に滞在した人たちからも、子供の方が英語の獲得が早かったという話をよく聞く。外国語学習は、幼いうちから始めるべきなのだろうか。大人になってからでは遅すぎるのだろうか。この点については、ビアリストク&ハクタ(2000)でさまざまな研究が紹介されている。議論の主な点は、そもそも第一言語の獲得に臨界期があるのかということから、第二言語獲得に臨界期があるのかということである。臨界期という言葉は、心理学や生物学で「時間にしばられた学習」を説明する際にしばしば使われる。時間にしばられた学習というのは、発達のある時期にある経験をして獲得しておかないとその後その能力を獲得することが不可能であることをさし、臨界期はその時間的な制限をあらわす言葉として用いられている。

ビアリストク&ハクタ(2000)は、第一言語の獲得に臨界期があることを明らかに否定することは難しいとしている。それらは、事情があつて幼少期に言語的環境を奪われた子供たちが、その後いくら学習をしても限定的

な言語能力しか獲得できなかったという事例や、コミュニケーションの手段としてアメリカ手話 (American Sign Language; ASL) を使っている成人聴覚障害者についての研究 (Newport, 1990) などから考察された。Newport (1990) では、35歳から70歳までの被験者がASLを使い始めた時期によって三つのグループに分けられ、ASLの構造上の特徴をどれだけ理解しているかということが調べられた。その結果、ASLの単純な構造上の特徴についてグループ間の差はなかったが、複雑な特徴については早期学習者から晚期学習者になるにつれて成績が悪くなった。事例研究も含めて、これらの研究は方法上の問題点も多いが、一挙に臨界期を否定するまでには至らないという。

さらにピアリストク&ハクタ (2000) は、第二言語に臨界期があるかどうかについても考察をすすめている。研究をおこなううえで、第二言語の学習開始年齢と学習期間は統制が難しい変数である。たとえば学習開始年齢を変数にして一定期間後の成績をくらべようとすると、テスト時の被験者の年齢が異なることになる。同じ5年間の学習成果をみようとすると、9歳と23歳でそれぞれテストを受けることになった子供たちの成績を、直接比較してもあまり意味はないだろう。一方テスト時の年齢をそろえると、小さいときに学習を開始した方が学習期間が長くなり有利である。これらを注意深く統制した種々の研究を検討した結果、明らかな第二言語の臨界期を示唆するような結果は得られていないとしている。少なくとも、文法のような言語の抽象的側面を学習する能力については大人も子供も変わらない。しかし言語の音韻論的側面については、少し異なった結果が得られている。流暢な英語を話す人でも、長い間外国語なまりが消えることはない。Oyama (1976) は、16歳から30歳の間にニューヨークにやってきて5年から18年間在住しているイタリア人移住

者について、なまりの程度を評定している。その結果、合衆国在住の期間となまりの強さには関係がなかったが、なまりと移住年齢の間には高い相関があったという。幼いうちに移住した方が、なまりの程度は弱かったのである。

ここでも、第二言語のすべての側面が同じように発達するのではなく、音韻と文法では習得される様子が異なることが示されている。大人になってからでも文法などは十分習得できるが、なまりに表われるような音韻面では、小さいときから学習した方が第一言語発話者に近い能力が得られるということである。

なお言語を習得する際の音韻の学習については、他にも興味深い研究が紹介されている。第一言語と類似した音は、新奇な音よりも習得がむずかしいことである (Flege, 1991)。英語を第二言語として学んでいる外国人には、それぞれの第一言語によって学習の難しい音がある。日本人では、rとlの問題が笑い話としてもよく取り上げられる。英語で使われているrとlの音素は、厳密にいうと日本語にはない音らしいが、日本人はラ行の音をすべてlに近い音で発音しており、聞くにも話すにもlとrの区別が難しい。つまり第一言語と類似した音は、新奇な音よりも習得が難しいのである。日本人にlとrの音を弁別訓練しその成果をみる研究はいくつか行われているが、結果もさまざまである。ATR (1999) での研究では、成人でも訓練することによってかなりrとlの弁別が可能になることを示しているが、Ingvalson, Holt, & McClelland (2003) では4000回の訓練でも弁別ができるようにならなかった。Baddeley, Gathercole, & Papagno (1998) は、新奇な音韻を獲得する能力と新しい単語を獲得する能力が関連しているとし、それには作動記憶の音韻ループが関わっていることを指摘している。Abu-Rabia & Siegel (2002) は、アラビア語と英語のバイリンガルの子供たちに、両言語の能力と音韻的短期

記憶や作動記憶容量との関係を調べている。その結果、非単語の読みによって測定されるような音韻的な処理技能は、両言語において単語認知と高い相関を示しており、読みに困難を持つ子供は、両言語においてこの音韻的処理の成績がよくなかったことを明らかにしている。読みに困難を持つ子供たちは、作動記憶や文法的気づきに障害を持っており、視覚的よりむしろ音韻的な困難さが重要な特徴となっている。これらの研究が示すように、作動記憶のどのような働きが新しい単語学習と関わりがあるのかは、興味深い話題である。

6. どのような外国語教育が望ましいのか

最後に、どのような外国語教育が望ましいのか、また、できるのかを少し考えてみたい。これまで見てきたように、言語にはコミュニケーション能力や文法能力などさまざまな側面があり、どの能力を高めようとするかによって有効な方法は異なってくる。さらに「両方の言語がある閾レベルに達していれば、バイリンガルであることは認知発達に肯定的に働く」という閾仮説も、山本（1991）が指摘しているように、何を閾レベルの基準としているのかは明確ではない。しかし教育現場でカリキュラムを作るためには、どのような能力を身につけさせたいのか、そのためにはどのような方法がいいのかを具体的に考えなければならない。井上（2002）は、日本語を第一言語とし日本で育つ子供たちには、イマージョン・プログラムのような目標言語の中にどっぷりつかってみることも有効なのではないかと述べているが、どこでもすぐにイマージョン・プログラムのような環境がととのえられるわけではない。

安藤・福永・倉八・須藤・中野・鹿毛（1992）は、小学校5年生を対象に児童のさまざまな適性と英語教育の教授法との関連を検討している。ここではコミュニケーション能力の育成

に強調点をおいた教授法としてコミュニカティブ・アプローチ（Communicative Approach）と伝統的な文法中心的教授法（Grammatical Approach）との比較が行われている。安藤ら（1992）によると、コミュニカティブ・アプローチの一般的特徴は以下の6つである。

①実際の場面での言語使用（言語使用の目的が明確）、②談話の持続、③意味や機能（何を言いたいかという発話の意図や発話によって何かをするという言語機能）の重視、④発話の欲求、必然性、⑤インフォメーションギャップの存在（お互いがすでにわかっていることを言ったり尋ねたりしない、すなわち意味のない発話はしない）、⑥言葉の適切さ（状況に応じた言い回し、丁寧さ）などである。

さらに⑦教師による母国語の使用を必要最小限にとどめる、⑧文法的な説明をせず文法的な正確さを副次的なものとし、⑨発話不安を最小限にするため受容的な雰囲気づくりに努めるなどが、教授法の留意点としてあげられている（長澤、1988）。このコミュニカティブ・アプローチは、表1で示したイマージョン・プログラムと似た特性を備えており、聞いたり話したりというコミュニケーション能力を育てることが目的なら、有効な可能性がある。

それでは、Cummins（1991）のいうもう一つ能力、すなわち言語的な手がかりのみに頼って言語を分析するような文法的な能力についての学習はどうであろう。これらは不要といえるのか。これも外国語学習の目的によると思われる。文法は言語の根幹をなすもののひとつであり、自分の言いたいことを的確に伝えたり、少し複雑な話を論理だてて話そうとするときには必須である。また読んだり書いたりする際にも必要である。外国で勉強したり仕事をしようとするなら、これらの能力を身につけることも考えなければならない。英語を母語としない学生が欧米の大学に入学するため入る語学学校のコースでは、話すこ

とや聞くこととともに、必ず書くことや読むことのクラスが設けられている。

ビアリストク&ハクタ(2000)は「第二言語の学習法に唯一の正しい学習法はない。言語習得にはたくさんの側面があり、多くの次元がひとつの方法によってマスターできるものではない」と述べている。また個人の特性によって有効な教授法が異なる適正処遇交互作用(ATI)がみられるとも述べている。安藤ら(1992)の結果でもコミュニケーション・アプローチは知的能力に関して補償的に、文法的アプローチは特恵的に効くという適性処遇交互作用が示された。結局、人は自分の目標に従ってどのような外国語能力をどの程度まで身につけたいかを考え、それを習得するのに適した方法を選択することが大切だということであろう。また日本人の子供たちへの外国語教育だけでなく、海外から日本にやってきた外国人子弟への語学教育も、今後ますます必要性が高まり議論を重ねていかなければならないだろう。

文献

- Abu-Rabia, S., & Siegel, L. S. 2002 Reading, syntactic, orthographic, and working memory skills of bilingual Arabic-English speaking canadian children. *Journal of Psycholinguistic Research*, 31, 661-678.
- ATR人間情報通信研究所(編) 1999 ATRCALL 完全版英語リスニング科学的上達法-音韻篇- 講談社.
- 安藤寿康・福永信義・倉八順子・須藤毅・中野隆司・鹿毛雅治 1992 英語教授法の比較研究 - コミュニカティブ・アプローチと文法的・アプローチ - 教育心理学研究 40 247-256
- Baddeley, A.D., Gathercole, S.E., & Papagno, C. 1998 The phonological loop as a language learning device. *Psychological Review*, 105, 158-173.
- ビアリストク&ハクタ 2000 『外国語はなぜなかなか身につかないのか-第二言語学習の謎を解く-』重野純訳 新曜社.
- (Bialystok, E., & Hakuta, K. 1994 In other words: The science and psychology of second-language acquisition, BasicBooks.)
- Cummins, J. 1978 Educational implications of mother tongue maintenance in minority-language groups. *The Canadian Modern Language Review*, 34, 395-416. (山本雅代 1991 バイリンガル(2言語併用者)大修館書店.)
- Cummins, J. 1979 Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*, 49, 222-251. (山本雅代 1991 バイリンガル(2言語併用者)大修館書店.)
- Cummins, J. 1991 Interdependence of first-and second-language proficiency in bilingual children. In E. Bialystok (ed), *Language processing in bilingual children*. Cambridge University Press.
- Flege, J. 1987 The interlingual identification of Spanish and English vowels: Orthographic evidence. Special issue: Hearing and Speech. *Quarterly Journal of Experimental Psychology: Human Experimental Psychology*. 43, 701-31.
- 芳賀純 1988 言語心理学入門 有斐閣.
- Ingvalson, E.M., Holt, L.L., & McClelland, J.L. 2003 Generalization in Japanese /r/-/l/ Perception: Shining a Light on the Right Cue. Paper presented at the Psychonomic Society, Vancouver.
- 石王敦子 1999 バイリンガルの認知 梅本堯夫監修 川口潤編『現代の認知研究』第9章 培風館.
- 石王敦子 2005 バイリンガルの認知モデルをめぐる研究動向 追手門学院大学人間学部紀要 18, 1-11.
- 井上智義 2002 二言語教育と子供の認知発達-バイリンガルの分類に着目して-井上智義編著『異文化との出会い:子供の心理と発達-国際理解教育の視点から-第3章 Pp.29-43. プレーン出版.
- 長澤邦紘 1988 コミュニカティブ・アプローチとは何か-その理論と展開 三友社出版.
- Newport, E. 1990 Maturational constraints on language learning. *Cognitive Science* 14, 11-28.
- Oyama, S. 1976 A sensitive period for the acquisition of a nonnative phonological system.

Journal of Psycholinguistic Research, 5,
261-285.

(ピアリストク&ハクタ 2000『外国語はなぜな
かなか身につかないのかー第二言語学習の謎を
解くー』重野純訳 新曜社.)

山本雅代 1991 バイリンガル (2言語併用者)
大修館書店.

山本雅代 2000 日本のバイリンガル教育 明石書
店.